

「生き生きとした希望～あなたの希望はどこに？～」

ペトロの手紙一 第1章3～9節

2024年11月17日(主の日)

藤沢北教会特別伝道礼拝

川嶋章弘(横浜指路教会)

あなたの希望はどこに？

私たちは希望があるからこそ生きていけます。将来に希望が持てるからこそ生きていきます。だから誰もが希望を探している。どこに自分の希望があるだろうか、何に自分の希望を置いたら良いだろうか、と考えながら生きています。「あなたの希望はどこに？」と問われたら、私たちはどのように答えるでしょうか。

日本社会の未来に希望を感じていない

インターネットを検索していると、BIGLOBE（ビッググローブ）という会社が、全国の18歳から69歳の男女1,000人を対象にしたアンケート調査の結果を発信していました。「日本社会の未来に希望を感じるか」という質問に対して、18歳から24歳までのいわゆる「Z世代」では、「感じる」6.6%、「やや感じる」18.9%、併せて25.5%が「希望を感じている」という結果になっていました。つまり残りの74.5%は、あまりもしくは全然希望を感じていない、ということになります。私は40代ですが、40代では、「希望を感じる」1.0%、「やや感じる」17.0%、併せて18.0%が「希望を感じている」という結果で、60代では、「希望を感じる」2.0%、「やや感じる」20.0%、併せて22.0%が「希望を感じている」という結果でした。この調査がどれほど正確なのかは分かりませんが、大体の傾向は捉えていると思います。年齢を問わずほとんどの世代で、7割以上の方が日本社会の未来に希望を感じていない。それが私たちの社会の現実なのです。

この調査は若年層の意識調査が目的ですので、日本の未来に希望を感じていない理由については、18歳から24歳までの回答しかありませんでした。その回答の上位には、「政治に期待が持てない」、「少子高齢化が進んでいる」、「自分の資産が安全ではない」、「格差社会により分断が進んでいる」などがありました。これらの理由は、おそらく若年層だけでなくすべての世代に当てはまると思います。先行きが見えず、将来への不安が大きいために、今、私たちは希望を持ちにくい（ないし持てない）のです。私自身はいわゆる「右肩上がりの時代」をそれほど知っているわけではありませんが、右肩上がりの時代には、個人としては色々大変なことがあったとしても、社会全体としては今年より来年のほうが経済的に豊かになる、と信じられたのだと思います。だから色々な苦労があっても将来に希望を持ってました。しかし今は「右肩上がりじゃない時代」、いえ「右肩下がりの時代」です。今年より来年のほうが豊かになるとは限らない。そこに希望を置くことはできない

のです。

聖書が告げている希望とは？

ところが、そのように希望を持ってない時代に生きている私たちに、聖書は告げています。「あなたがたには希望が与えられている」「あなたがたには生き生きとした希望が与えられている」、と告げています。聖書が告げている、この「生き生きとした希望」とは、どんな希望なのでしょう。先ほどお読みした聖書箇所（3節）の途中からこのように言われています。「神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え」。聖書は、とりわけ福音書を読むと分かるように、イエスという人物が家畜小屋で生まれ、地上の生涯を歩まれ、十字架に架けられて死なれ、そして死者の中から復活したことを語っています。とはいえ2000年ほど前にイエスという人物が十字架に架けられて、死者の中から復活したというだけなら、今を生きる私たちと何の関係があるのでしょうか。せいぜいすごい人がいたものだと思えるくらいです。しかし先ほどの3節は、この2000年前の「死者の中からのイエス・キリストの復活」によって、今、私たちに「生き生きとした希望」が与えられている、と言っているのです。

洗礼を受けて新たに生まれる

3節では、「わたしたちを新たに生まれさせ」とも言われています。それは、洗礼を受けてキリスト者になることを意味しています。洗礼を受けてキリスト者になるとは、新たに生まれること、新たに生まれさせられることです。少し脱線しますが、私たちがこの地上に生まれた日を第一の誕生日と呼ぶならば、洗礼は第二の誕生日と呼ぶことができます。第一の誕生日が私たちの人生のスタート地点であるように、第二の誕生日はキリスト者として歩み始めるスタート地点です。洗礼を受けてキリスト者となることは、色々と準備を重ねた先にあるゴールのように思われるかもしれませんが、実は洗礼を受けることはキリスト者としてのスタート地点に立つことなのです。3節は、そのように洗礼を受けてキリスト者となり、新たに生まれさせられた者に、「死者の中からのイエス・キリストの復活」によって「生き生きとした希望」が与えられている、と告げているのです。

小アジアのキリスト者の現実

それは、キリスト者になれば困難に直面することがなくなり、希望を持てるようになるということでしょうか。あるいは先ほどのアンケート調査にあったような「政治に期待が持てない」、「少子高齢化が進んでいる」社会であっても、キリスト者になれば、そのようなことに悩むことなく希望を持って生きることができる、ということなのでしょう。もちろんそうではありません。6節の後半に、「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが」とあります。この手紙を読んでいた人たちは、色々な試練に悩まなければならない現実を生きていたのです。このペトロの手紙一は、小アジア（現

在のトルコ)にある諸教会に宛てて書かれた手紙で、紀元 90 年代に書かれたと考えられています。紀元 90 年代というのはローマ皇帝ドミティアヌスの時代で、彼はキリスト教徒を迫害しました。その迫害は帝国全域に及んだのではなく局所的であったようですが、ローマと小アジアでは激しい迫害が起こり、多くの殉教者が出たようです。この手紙の宛先である小アジアの諸教会のキリスト者は、まさにこの迫害のただ中にいました。たとえ自分は殉教しなかったとしても、周りの人たちから心無い言葉を投げられたり、冷たい視線を向けられたりすることがあったと思います。しかもその周りの人たちは、必ずしも赤の他人とは限りません。この手紙を読むと、教会の中にキリスト者でない夫がいる女性、あるいは逆にキリスト者でない妻がいる男性がいたことが分かります。小アジアのキリスト者にとって、自分の最も身近な人が、愛する夫や妻が、あるいは友人が、職場の同僚がキリスト者でないのは特別なことではありませんでした。そしてその身近な人たちが自分の信仰を理解してくれなかったり、否定したりしたかもしれないのです。今、日本に生きるキリスト者も、2000 年の隔たりを越えて、同じような苦しみや悲しみを少なからず味わっていると思います。このように紀元 90 年代に生きた小アジアのキリスト者は、いつ自分たちが捕らえられるか分からない、それどころかいつ教会が帝国によって滅ぼされるかも分からない、先行きの見えない、将来への不安しかない現実を生きていました。大切な人たちから自分の信仰を理解してもらえないという痛みや嘆きも抱えていました。小アジアのキリスト者は、私たちと同じぐらい、いえ私たち以上に、今年より来年のほうが良くなるとは、まったく信じられない時代に生きていたのです。客観的に見れば、小アジアのキリスト者の将来に、あるいは教会の将来に希望を感じられるはずがなかったのです。

生き生きとした希望

本日の説教の題を「生き生きとした希望」としました。3 節の言葉です。今日、すでに私は何度もこの言葉を口にしています。印象深い言葉です。しかし小アジアのキリスト者の現実とは、私たちの現実とはかけ離れている言葉のように思えます。小アジアのキリスト者の現実のどこに、私たちの現実のどこに、「生き生きとした希望」があるのでしょうか。印象的な言葉、心に残る言葉だからこそ、生き生きとした希望を持つことができない私たちのリアルな姿が突きつけられるのです。

それにもかかわらずこの手紙の著者は、小アジアのキリスト者と私たちに、「生き生きとした希望」が与えられている、と告げます。そのように告げることができるのは、この希望が私たちの内側にあるのではなく、また人間によって造り出されたのでもなく、私たちの外から神様によって与えられるからです。迫害の現実には生きているキリスト者の内側から、あのアンケートの回答にあったような困難な時代に生きている私たちの内側から、希望が湧いてくるはずがありません。むしろ私たちの心の内に渦巻いているのは不安や恐れ、嘆きや諦めです。また、何であれ人間が造り出した希望は、時代が変わり状況が変わ

れば泡となって消えてしまいます。今より将来のほうが豊かになるという「右肩上がりの時代」の希望は、跡形もなく消えてしまいました。きっとこれからも、手を替え品を替え、「ここに希望がある」と、まことしやかに言う人たちが現れるに違いありません。しかし人間が造り出す希望は必ず失われます。人間が造り出す希望は私たちを本当に生かすことはできません。神様が私たちの外側から与えてくださる希望だけが、私たちを本当に支え、本当に生かすことができるのです。

終わりの日の復活と永遠の命

この希望は、抽象的な希望ではありません。何だかよく分からないけれど神様は希望を与えてくださる、ということではありません。この希望は、「死者の中からのイエス・キリストの復活によって」、私たちに与えられている具体的な希望です。それは、私たちが将来、終わりの日に復活させられ、永遠の命に生きるようになる、という希望です。私たちは誰もが地上の人生において必ず死を迎えます。誰も死を免れることはできません。そうであれば私たちが必ず死を迎えることこそ、将来に希望を持たない究極の理由ではないでしょうか。「政治に期待が持てない」、「少子高齢化が進んでいる」。そういうことはもちろんあります。しかし突きつめれば、私たちの死こそ、将来に希望を持たない理由です。社会が順調なときには、死は覆い隠されていて、死に対して見て見ぬ振りをするのができたと思います。しかし順調でなくなると、それこそ「右肩下がりの時代」になると、見て見ぬ振りはできなくなります。懸命に勉強して、懸命に働いても豊かにならない。良くならない。そしてその先にある死を意識しないわけにはいかない。人生が虚しく思えてくる。だから私たちは将来に希望を持たない。持てるはずがない。けれども聖書は、私たちが地上の人生で迎える死の先で、復活させられて永遠の命に生きるようになる、と告げています。荒唐無稽なことを言っていると思われるかもしれませんが、どこにそんなことを言える根拠があるのかと思われるかもしれませんが、根拠はあります。主イエス・キリストです。2000年前に家畜小屋で生まれ、地上の生涯を歩まれ、十字架に架けられて死なれ、そして死者の中から復活された主イエス・キリストに根拠があります。主イエスが死者の中から復活されたことは、今を生きる私たちと何の関係もない出来事なのではなくて、過去の偉人の驚くべき出来事なのでもなくて、今を生きる私たちが地上の人生で死を迎えた先で、復活させられ永遠の命に生きることを約束し、保証している出来事なのです。主イエスが死者の中から復活して永遠の命に生きておられるから、洗礼を受けてその主イエスに結び合わされて生きている私たちも、地上の人生で死を迎えた先で、復活させられ永遠の命に生きるようになるのです。ここに、私たちの希望があります。神様が「死者の中からのイエス・キリストの復活」によって、私たちに与えてくださっている「生き生きとした希望」があるのです。

私たちが終わりの日に復活と永遠の命を与えられることが、4節では「あなたがたの

ために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しばまない財産を受け継ぐ者としてくださいました」と言われ、5節では「あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受ける」と言われています。この「天に蓄えられている、朽ちず、しばまない財産」が、また「終わりの時に現されるように準備されている救い」が、復活と永遠の命です。私たちは終わりの日に、この復活と永遠の命を受け継ぐ者とされています。この復活と永遠の命は、時代が変わり状況が変わっても、たとえ迫害の中にあっても、たとえ先行きの見えない、将来に不安しかないような時代にあっても、決して朽ちることも、汚れることも、しばむこともない財産であり、ここにこそ、私たちの希望があるのです。

生ける希望

それにしても「生き生きとした希望」とは、希望が生き生きとしているとは、どういうことでしょうか。別の翻訳を見ますと、「生き生きとした希望」は「生ける希望」と訳されています。どちらも味わい深い訳語だと思います。ただ「生き生きとした希望」と言われると、私たちがこの希望を生き生きと感じられるかどうかにかかっているようにも思えます。しかしそうであるなら、つまり私たちが自分の力で復活と永遠の命の希望を生き生きと感ずることができるといえるかどうかにかかっているなら、「生き生きとした希望」は、まことに心もとない希望にならざるを得ません。私たちには弱ってしまうときがあり、うずくまってしまうときがあり、「もう駄目だ」と思うしかないときがあります。そのとき私たちはこの希望を生き生きと感ずることなどできないでしょう。それどころかこの希望を見失ってしまうかもしれません。しかし「生ける希望」という言葉から示されるのは、この希望そのものが生きている、ということです。たとえ私たちがこの希望を生き生きと感ずることができなくても、この希望そのものが生きているのです。私たちがこの希望を生き生きと感ずられないような、見失ってしまいそうな、深い苦しみや悲しみの中にあるときも、復活と永遠の命の生ける希望そのものが私たちに働きかけ、私たちにこの希望を起こしていくのです。それが、希望そのものが生きている、ということです。

私たちはしばしば「希望を持っている」という言い方をします。しかし私たちが「持っている」希望であれば、私たちはその希望を「失う」こともあります。「生ける希望」は、そうではありません。私たちが「生ける希望」を持っているのではない。そうではなく、復活と永遠の命の「生ける希望」そのものが私たちに働きかけ、私たちにこの希望を起こし、与えるのです。

「死んだら終わり」ではない

終わりの日の復活と永遠の命の希望によって、私たちの生き方はまったく変わります。洗礼は新しく生まれることと申しましたが、洗礼によって与えられるこの希望によって、私たちの人生の捉え方もまったく変わるのです。私たちの社会では、「死んだら終わり」と考えている方が少なくありません。漠然と「死んだら終わり」と思っている方も多いで

しょう。しかしこの希望は、「死んだら終わり」ではない、と私たちに確信させます。「死んだら終わり」なのであれば、どうせ死ぬのだから、自分の好きなように生きれば良いと考えたり、どうせ死ぬのだから何をしても意味がないと考えたりします。自分の好きなように生きること、人生に意味がないと思って生きるのも、どちらも責任ある生き方とは言えないと思います。しかし「死んだら終わり」ではないのであれば、私たちは長くても100年ほどの地上の生涯だけではなく、終わりの日の復活と永遠の命へと目を向けます。そこに希望をおいて生きるとき、私たちは自分が生きている間だけでなく、死んだ後のことも考えて、今に責任を持って生きるよう導かれるのです。また、「死んだら終わり」であるなら、地上の生涯が苦しみや悲しみばかりであれば、その人生は「負け組」ということになってしまいます。しかし復活と永遠の命の希望は、地上の生涯にどれほどマイナスが多かったとしても、将来、終わりの日にそれと比べられないほどはるかに大きなプラスがある、と約束しています。そのことに希望を置くことによって、苦しみや悲しみの多い人生の中でも、私たちは絶望することなく、忍耐して生きることができるのです。

今、心から喜んでいる

6節で「それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです」と言われています。ある人は、これは「今」ではなく「将来」のことを言っていると理解します。「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならない」としても、苦しみ悲しまなければならぬとしても、将来、終わりの日には、心から喜ぶことができると理解したのです。確かに、終わりの日に地上の生涯のマイナスと比べられないほどのプラスを与えられて、私たちは心から喜んでいるに違いありません。しかし、それだけではありません。「死んだら終わり」ではないとは、終わりの日の復活と永遠の命に希望を置くとは、「将来」に関わるだけでなく「今」に関わります。この復活と永遠の命の生ける希望は、「今」の私たちに心からの喜びを与えるからです。「それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです」と言われているのは、確かに「今」のことでもあるのです。だから小アジアのキリスト者は、迫害の中にあっても、この生き生きとした希望によって、絶望することなく、それどころか心から喜んで生きていました。「死んだら終わり」ではないから、私たちは苦しみや悲しみの多い人生にあっても、なお心から喜んで生きることができるのです。

私たちの希望は主イエス・キリストにある

さらに8節ではこのように言われています。「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ち溢れています」。私たちは誰も自分の目で主イエス・キリストを見たことがありません。主イエスは十字架で死なれ、復活され、天に昇られました。私たちは、今、天におられる主イエスをこの目で見ることはできません。それにもかかわらず、私たちは「キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じて」いる、と告げられています。なぜでしよ

うか。それは、私たちが主イエスを愛するより前に、主イエスが私たちを愛してくださったからです。私たちが主イエスを知るよりも前に、主イエスを信じるよりも前に、主イエスが私たちを愛してくださり、私たちのために十字架で死んでくださり、復活してくださったからです。いえ、それだけではありません。天におられる主イエスが、今も、聖霊の働きによって私たちを愛し続けてくださっているから、私たちは「キリストを見たことがないのに愛し」ているのです。私たちが主イエスを愛せるとしたら、主イエスが私たちを愛してくださっているからです。私たちが主イエスを信じることができるとしたら、主イエスが私たちに信仰を与えてくださっているからです。そして私たちが本当に希望を持って生きることができるとしたら、主イエスが私たちに復活と永遠の命の「生き生きとした希望」を与えてくださっているからなのです。今も生きて働かれる主イエスが、この希望を「生ける希望」としてくださっています。今も生きて働かれる主イエスが、私たちに地上の人生の死で終わらない、復活と永遠の命の「生き生きとした希望」を与え続けてくださっています。だから私たちは苦難や試練の中にあっても絶望することがありません。忍耐することができます。それどころか心から喜んでいる。言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ち溢れているのです。

私たちの希望はどこにあるのか。主イエス・キリストにあります。主イエス・キリストによって与えられている終わりの日の復活と永遠の命にあります。ここにだけ、私たちを本当に生かす希望が、生き生きとした希望があるのです。